

第98号
平成29年
3月

HPに 創刊号から
連載中

もう一つの道

情報は、うのみにせず、注意
深く徐々に試して下さい。

山田整骨院
熊本市中央区出水 4-25-1
096-364-7611

<http://yamadasu.com/>

熊本交通事故, 山田整骨院

[http://www/jiko-](http://www/jiko-kumamoto.net/)

[kumamoto.net/](http://www/jiko-kumamoto.net/)

父を救い、父を大いに喜ばせた断食療法

尾藤 章 著 宿便と潜在意識(昭和58年発行)

私の母は、父が40歳の時、三十五歳で腸チブスでなくなりました。それまで達者でよく働いていた父が、母の死んだあと、急に体が弱くなってしまいました。今考えますと、肝臓疾患だと思いますが、百メートルか二百メートル歩くと、道端にかがんで休むという状態でした。

私は数え年十六歳、小学校高等科を卒業したばかりの年です。そのため私は、社会に出るとすぐ一農家の大黒柱のような存在にならざるを得なかったのです。三十歳の時、西会に入会して、西式生活を始めたのですが、これが父を救い、父を大変喜ばせた事になりました。平床硬枕を使い始めますと、父もすぐそれを欲しいと申し、硬枕等は、コンクリート製のものが手に入りましたのでそれを上げたところ、大変喜んで、死の最後まで愛用されました。

温冷浴用の水風呂を作りますと、私が入るのを見てすぐに、「よし、今度は俺の番だ」という具合で、ほんとうに喜んでよく温冷浴を実行いたしました。私が二日間の断食を致しますと、

「よし、今度は俺の番だ」と、断食をいたしました。私が四日間、六日間、八日間、八日間と断食して、断食が終わって快復食に入りますと、そのつど父は、「よし、今度は俺の番だ」と、断食をいたしました。父の体は日増しに良くなっていきました。

私が西式生活に入ってから、数年後だと思いますが、一人の女性が尋ねて参りました。

「私は東京御徒町の本田ふみと申します。今度、静岡の前に一軒家を借りまして、そこで三週間の断食をしたいと思えます。御手数でもどうか指導して下さい」と言うのです。私が八日間しか断食していないのに、その人は三週間やりたいと言うのです。しかも瘠せた一見弱そうな婦人です。多少、躊躇もしましたが、遂に面倒を見る事になりました。西先生の書かれた「断食療法」の本をよく読みまして、失敗のないように注意してお世話をいたしました。その婦人は無事に三週間の断食を終了して、喜んで東京へ帰りました。

この話を聞いてか、静岡市平山の古本二郎さんが、自宅で三週間の断食を始めたのです。古本さんは小学校の教員でしたので綿密に状況報告をして下さいました。三週間の断食が終わって、快復食に入りましたから約一週間ばかりの間に、随分たくさんの排泄物があつたようです。もちろん、ある程度の宿便も出た事に間違いありません。

父は、「断食って面白いものだなあ、ようし、俺も今度は三週間の断食をやってみる」と言いまして、早速始めたのです。朝は普通に起きまして、掃除をする、昼と晩の炊事もやってくれますし、お風呂も湧かしてくれました。食事をしている普段の日とほとんど変わらない動作でした。三週間の間に、昼間、寝た事は一日もありませんでした。驚いたことには、二週間目になった時の事です。当時、私は蜜蜂を飼っていたのです。花を求めて十キロくらい離れた服織の千代というところに預けてあつたのです。私は、「今日は蜂を見に行ってくる」と

と言いますと、父は、「蜂なら俺が行って見て来る」「だって、父さんは断食ではないか」「断食だって、平気だ」「自転車にも乗れないのに」「いいや、平気だ、歩いて行って来る」

往復二十キロの道を歩いて、蜂を見て、夕方帰ってきました。平気の平左の顔で帰って来ました。私と一緒に一つの屋根の下に暮らしている。それで不安というものが無かったらしいのです。死ぬ少し前に、三週間の断食を今一回やりましたが、その時は寝てやりました。

七十一歳で亡くなりましたが、その最後は憎たらしいほど落付いて、堂々たるものでした。秋の彼岸の入りの日の朝です。「昨夜は眠れなくて、俳句を作ったよ。その俳句を書いて置こうか」と言い、筆を取りました。

木犀の香りに飽きし寝床哉
遺したき、言の葉もなし 稔る秋
七年に余る夢見る 夜長かな
虫淋し 生死の境 迎る夜半

「今日は寝たいから寝るよ」と言って床に入りました。書いた俳句を見ますと、木犀の香りに飽きし寝床哉。木犀は父の枕元に程近いところに大きい木があります。次の遺したき言の葉は、遺言と分かりました。別に遺言は無いよの意味です。父は死ぬ気になったのです。けれども、新聞が来れば目を通す、夕方風呂が湧けば入る普通の日と変わりはありませんでした。ただ、食事はしませんでした。

彼岸の中日の日です。午前二時頃、家内一同、父の枕元に呼び集められました。

「今日はなあ、旗日で良い日だ。俺は今日旅に立つ。考えてみると、この家には十年も十五年も医者 came 来た事が無い。旅立ってから医者が来たのではまずい。早く医者を呼んでくれ」

と言うのでした。「夜が明けたら、呼んで来るから」と、あやして、家内一同、父の枕元で話をして時間を待ちました。父は何の話でもしました。九時頃、長男と次男の二人が医者を呼びに行きました。すぐに来てくれました。父は「やあ先生、今日は旗日でお休みの日をどうもすみません。私は今日、旅に立ちたいと思ひまして、私は注射をした覚えはありませんが、今日はたっぷり注射して下さい」と。医者も驚いたようです。

「私も随分長い間、この稼業をしておりますが、こんな病人に、出逢ったのは初めてです」と申しておりました。

父が余りにも平常心でして、何の話もしますので、私はついうっかりと、弟や妹に知らせる事を忘れていたのです。偶然か弟や妹は、その日の夕方来ました。その日のうちに、父がこの世を旅立たなくて助かりました。彼岸の明けの日の夕方、「その床の間にあるいただいたものを、子供等に分けて与えよ、それから餅をつくれ」と言いますので、家内は妹等に手伝ってもらって餅をつくりました。餅が出来たあたかもその時、父の呼吸が、少し乱れました。

「苦しいのか」と言いますと、「馬鹿な事を。死ぬ時には誰も肩息になるんだ。これが肩息だ」と、それで息が絶えました。「とうとう旅に行ってしまった」と、みんなで言いました。父を助けて健康にしてくれたのは西式健康法であり、特に断食でした。羨ましいほどの大往生でした。

「章よ、ありがとう」と、父を健康にした事が、私の一番の孝行でした。

あ と が き

この話には西式で健康になった事、断食した後心安らかに最期を迎えられた事が書いてあります。71歳で亡くなられたとの事ですが、これは昭和24年の出来事で当時では長生きの方だと思います。健康で人生を過し、思い遺すことなく旅立つことが出来れば最高の人生だと思います。私も1週間の断食、2週間の回復食を行いました。頭も体も綺麗になり、スッキリしました。チューブにつながれたままでなく、断食をして自分の意思で有終の美を飾る事が出来れば理想的です。